

特集1 保育の空間づくりで私が大切にしたい視点

# 空間づくりで大切にしたいこと 工夫している点について



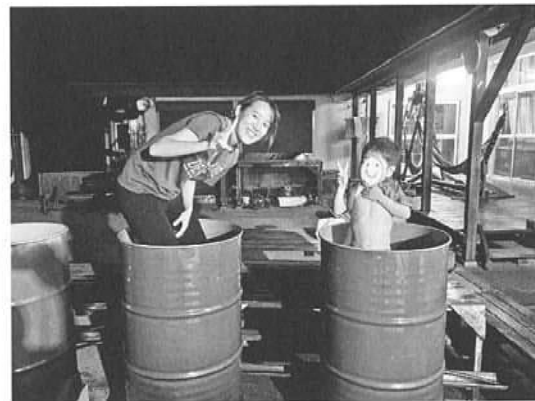
初瀬基樹 (熊本・河内からたち保育園)  
Naoki Hasegawa

## 心地よい空間

自分が「心地よい」と感じる場面を具体的に想像してみてください。どんな場所で、誰と、何をしていますか？ 私だったら、自宅のリビングでソファにゆったりこしかけて、ビールでも飲みながら映画を見ている

場面、もしくは、山や海、川など自然のなかへ家族とドライブして、景色のいいところでゆったり散策している場面を想像します。慌ただしい毎日を過ごしているので、きっと癒しを求めているのですね。

あるいは、私はもともと木工などのモノづくりが好きなので、あれこれ考えながら設計しているときや、実際に作り始めると楽しくて事務仕事そっこのけで夢



中になってしまふことがあります。園には、自作の狭い木工室(作業小屋)があるので、道具や資材、いろいろな物で溢れかえっていて作業するスペースはほとんどありません。ほかの人からしたら、とても快適とは言えない雑多な空間だと思うのですが、作ることに夢中になっているときの私にとっては、暑くても寒くても、とても快適な空間であり、心地良い空間になるのです。そのときの気分や体調、誰と何をして過ごすかといった様々な要因によって、同じ空間であっても感じ方は変わります。保育の場での環境構成、空間づくりにおいても、そこにいる子ども自身の気分や体調、そして、まわりの保育者や友達との関係が非常に重要な要素になると考えられます。

## Tくんのドラム缶風呂

てみようと気が変わったようです。「じゃあ、服脱いでおいで」と、O保育士が声をかけると「ヤダ、脱ガナイ」。Tくんは、足だけ浸かっているO保育士の方を見て「Oチャン(保育者)モ入レル?」と訊くので、「Oちゃんといっしょに入るの?」「Oちゃんみたいに足だけ入ってみる?」と尋ねると、Tくん「入ッテミル」とO保育士のそばへ来ました。そこでO保育士が抱っこして足だけお湯に浸けてみると、Tくんは抵抗なく足を浸けることができました。

O保育士がTくんを抱っこしたまま「ズボン脱いだら?」と言うと、すんなりズボンを脱がせてくれたので、「パンツも脱ごうか」とパンツを脱がせようとする。Tくんは「チガウ チガウ」と抵抗。O保育士「パンツは脱ぎたくないんだね」と手を止めると、Tくんは「パッド、パッド」とパンツに挟んでいたおねしょパッドを自分で外そうとしていました。

「パンツは脱がないけど、パッドは外したいんだね」とパッドだけを外し、O保育士が「上のシャツは?」とたずねると、Tくん「脱ガナイ」。結果、パン

が気になってたびたび見に来ていたTくん、途中で何度か「Tくんも入る?」と尋ねてみましたが「入ラナイ」。友だちみんなが上がった後もドラム缶風呂の様子を見に来たTくんは、O保育士が「Tくんも入ればよかったのにも、今からちょっとだけ入ってみる?」と尋ねてみると「入ル!」。友達の様子を見て、自分も入

ッとシャツは着たままでしたが、ドラム缶風呂に機嫌良く一人で入ることができました。

立っていても、パンツが濡れてしまうぐらいの深さだったので、結局パンツは濡れてしまいました。Tくんは濡れないように自分でシャツをまくり上げてニコニコ。「シャツ、脱げば?」と声をかけますが、やっぱり「ヤダ」。そのままではらく腰湯を楽しむTくん、入ったら入ったで、今度は「そろそろ上がるか?」と訊いても「マダ……、マダ……」となかなかお風呂から上がるうとしません。Tくんなりにドラム缶風呂を満喫しているようでした。

Tくんにとって「ドラム缶風呂」は、はじめ得体の知れない、近寄りたがたいものだったことでしょう。「お風呂」ということはわかっていたとしても、初めてのことで経験がないので不安がいっぱい。でも友達が楽しそうに、そして気持ち良さそうに入っている姿を見て、やっぱり入ってみようかなという気になったけれど、一人で入るのはちょっと不安。保育者と一緒に入ったら大丈夫かな……と考えたのかもしれない。いざ

九月中旬に園でお泊り保育を行いました。夜寝る前に子どもたちは園庭で恒例のドラム缶風呂に入ります。初めてのことに不安が強いTくんは、保育者が「ドラム缶風呂入ろうか?」と誘っても「入ラナイ」と拒否。「じゃあ、シャワーだけしようね」とシャワーをして着替えて、あとはもう寝るだけの状態になっていました。ほかの子たちがドラム缶風呂に入っている様子

入ることになっても、ズボンも脱いでいいけど、パンツは脱ぎたくない。パンツは脱がないけれど、おねしょパッドは外したい。シャツは脱がないけど濡れるのは嫌だから自分でまくり上げる……などなど、周りの大人には少々理解しがたい、Tくんなりのちよつとしたこだわりはありましたが、保育者が丁寧にかかわり、Tくんのこだわりを尊重してあげることで、このドラム缶風呂という得体のしれない空間を、Tくんにとって「心地よい空間」に変えることができたのではないかと思うのです。

保育者が、はじめからTくんの気持ちを無視して強引にお風呂に入れてしまったら、きっとTくんにとって嫌な思い出とともに、その後もドラム缶風呂を楽しむ気にはなれなかったかもしれません。また、友達の姿を見て入ってみようかと思ったときに保育者が「入ってみる？」とタイミング良くたずねていなかったら、あるいは、さっき「ハイライナイ」って言ったから、もう入らないものと決めつけて「時間切れ」にしてしまっていたら、さらには、入る気になつてそ

ばまで来たときに、保育者が「服を脱いで裸にならなきゃ入っちゃダメ」と無理やり服を脱がせたりしていたら……、いずれにしても、ドラム缶風呂が心地良い空間にはならなかっただろうなあと思うのです。あらためて日頃からの保育者との信頼関係、丁寧なかわりが重要だと感じた場面でした。

## 同じ環境(空間)でも 感じ方は常に同じではない

空間をどのように感じるかは、その環境が構成されている要素<sup>①</sup>に加え、誰といるのか、その人自身がどんな目的でいるのか、またそのときの気持ち、感情、体調、時間感覚<sup>②</sup>など、さまざまな要因によって感じ方は大きく左右されるものであり、流動的なものです。人はいつも同じ空間を求めているわけではないし、同じ空間に身を置いたとしても、感じ方はいつも同じとは限りません。

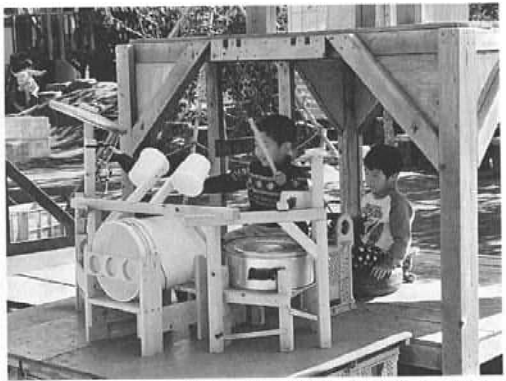
子どもたちに心地よい空間を保障するためには、ま

ずは園にいる大人たちから醸し出される雰囲気(人的環境)に気をつけなければなりません。「何か、しでかすんじゃないか?」「トラブルは未然に防がなきゃ」など、まわりの大人たちが子どもたちを監視するような目つきで子どもたちのそばにいたら、子どもたちは心から安心して遊ぶことはできないでしょう。「こんな力をつけるために、この活動をさせなきゃ」と大人の一方的な思いで子どもたちに活動をさせているとしたら、子どもたちがその活動を思いっきり楽しむことは難しいでしょうし、子どもたちのなかから斬新なアイデア、豊かな発想が生まれてくることもないでしょう。日頃から「保育者が温かなまなざしで子どもを見守っているような保育」「子どもたちが心から安心して、やりたいことがとことんできるような保育」を心がけたいものです。

そんなことを考えているうちに、わが園では、あまりガチガチの指導計画を作成しなくなりました。以前はきっちり指導計画を立て、その評価、反省をしていたのですが、それだとしても大人の意図する活

動が重視されてしまいがちで、大人の思い通りに子どもを育てようとしてしまうことにつながり、それは私たちが理想とする保育とは違うんじゃないかと思うようになったのです。それで今は、昼のミーティングや月に一回全職員で夕方に行う職員会議、同じく月に一回の園内研修などで、子どもたちの姿を出し合うことを中心にして、そこから「こんなことに興味が出てきているから、こんなものも用意してみようか」、「こんな環境にしてみようか」、あるいは「こんな取り組みを提案してみてもどうか」など、ざっくりとした感じのものにしています。

この数年は、指導計画の作成に時間と労力をかけるよりも、日常のなにげない暮らしのなかにある、子どもたちの「何かに興味・関心を示している姿」「夢中になっている・熱中している姿」「チャレンジしている・困難に立ち向かっている姿」「考えや気持ちを表現している姿」「自分の役割を果たしている姿」、さらには「大人の子想を超えるような言動」に着目していこうと、ラーニングストーリーという記録に力を入れて取り組



んでいます。

ただ、今のやり方も、私自身、葛藤がないわけでは  
ありません。「もっと計画的に保育内容を考えて実践  
し、それをきつちりと評価、反省すべきではないか」  
「もっと今の子どもの姿から、この子が何を学び、どん  
な力を身につけているのか、これからこの子にすべき  
ことは何かについて、職員とともにさらに細かく観察、  
分析する必要があるのでは」という強迫観念のような  
ものに襲われることもしばしばあります。

しかし、人は、物を組み立てるのとは違い、計画通  
りに育てようとして計画通りに育つなんてことはあり  
得ませんし、ましてや、「解の無い問いに解を見いだせ  
る人材」を育てていこうとしている世の中で、大人が  
答えを持っているものだけを教えこむような保育・教  
育では、今の大人たちを超えるような人には育たない  
だろう。だいたい、まわりからそんな目で見られてい  
たら、子どもたちも心から安心して好きなことができ  
ないのではないか。もっとも「大人の予想を超える  
ような子どもたちの姿を大いに認め、そうした姿を

おもしろがっているぐらいじゃないと！」と自分に言  
い聞かせているところです。

### 環境構成（空間づくり）で 工夫していること

思いつきり体を動かして遊びたいときもあれば、部  
屋でゆっくり絵本を読んだり、寝転んで過ごしたいと  
きもあるでしょう。あふれる思いを絵で表したいとき、  
ブロックで形にしたいとき、繰り返し単純な作業な  
のになぜか夢中になってやり続けてしまふときなど、  
自分で「これがやりたい」とはつきりと意識していな  
かったことでも、そのときの気分でなんとなくやって  
みて、次第に夢中になっていくこともあるでしょう。  
夢中になれなかったら、また別のことをやってみる。  
もちろん、何もせず、ただひたすらハンモックに寝  
転んで景色を眺めていたとしても誰からも文句を言わ  
れない。そんなふうには、できるだけ、子どもたちがそ  
の時の気分に合わせて、自ら選んで自分のしたいこと

を気兼ねなくできる環境を用意してあげたいと思っています。

子どもにとっても、大人にとっても「安心できて心地よい空間」、「やってみたいくなるものがたくさんある空間」、さらにアフオーダンスとかいうのでしょうか、解釈が間違っているかもしれないですが、「こんなのがあったらこんなことしたくなるよね」とか、「これはこうやって遊ぶもの」、「こうやって使ってね」など、いちいち説明しなくても、「そこに置かれたものや環境から自然に動きを誘われるような場所になるように」ということも考えています。

例えば、ソファーがあつたらそこにゆったり座りたくなり、そのそばに絵本棚があれば絵本を手にとって読むこともできるとか、紙と描くものが常においてある大きめの机があれば、そこで好きな時に好きなだけ絵を描くことができます。わが園の園庭にはバケツや鍋などを使った手作りのドラムセットを置いていますが、毎日のように小さい子から大きい子まで、通りすがりに叩いてみては、いろいろな音の違いや独創的な

る「子どもは自ら成長したいと願っている」という立場に立って、大人が立てた計画通りに子どもを育てようとするのではなく、子どもの興味、関心、挑戦心（「する」か「しない」か選ぶ自由も）を大切にしていきたいと考えています。さらに「夢中になって遊ぶ」姿を保障していこうと職員間で確認し合っています。子どもが自分で自分の興味のあることを見つけて、何でもやってみて、「僕ってああいう遊びはあんまり好きじゃないんだけど、こういう遊びは好きなんだよなあ」ということに気付いていけることも大事な経験だと思っています。そのためにはできるようにするための「効率の良さ」だけを求めず、なんでも試してみるための一見無駄に見えるかもしれない「たっぷりの時間」が必要だと思えます。そうした生活のなかで、子どもたちが自ら「自分らしさ」を発見していくこと、周りの人から「自分らしさ」を認めてもらえること、そしてその「自分らしさ」に誇りを持って生きていけるようになっていけば良いと考えています。

「こんな力を伸ばすために、こんな環境を……」も頭

リズムを楽しんでいます。これまた手作りのマイクスタンドやギターなども用意したところ、友達の間で踊りと合わせてバンドごっこがはじまつたり……。音への興味、関心は「感性」を磨いているときであり、どんな音が出るのか試している姿はその子なりの立派な「表現」である」という言葉が、本当にその通りだなと感じます。

このように環境自体が子どもの興味や関心、好奇心を誘発したり、挑戦心をくすぐるようなものであったり、ちょっと一人になりたいとき、心を落ち着かせたいときに落ち着ける場であったり、大人でも「見たらやってみたいくなる」ものを用意しておいて、大人もそこにいたら子どもと同じ気持ちになれるような場所、そんな空間作りを心掛けています。

## 子どもの見方を変えて、 子どもの味方に

私たちの園では、「子どもは自ら育つ力を持ってい

の片隅にありはするのですが、それよりも「こんな環境を用意したら、子どもたちはどんな反応を示すだろうか」、「どんなふうでこれで遊ぶだろうか」、そのように考えることの方が多くなってきているように思えます。

「夢中になって遊んでいたら、いつのまにかいろいろな力が身についていた。（目に見える力に限らず、心が強くなっていた、心が豊かになっていた）」が理想だなあと思うのです。

環境構成、空間づくりを考えるにあたって、子どもたちがその環境（空間）に出会ったときに、「なんかおもしろそう」「やってみようかな」など、興味が湧くような環境を工夫し、やり始めたなら集中して取り組めるような環境を整えたりすることは、とても大事なことです。しかし、繰り返しになります、子どもが自ら何かをやるうと動き出すためには、ベースに「安心感」や「気楽さ」「信頼感」が必須です。ですから、日頃の保育者との信頼関係、まわりの友達との関係などのベースがしっかりしていなければ、いくら環境だけを整え

でも無意味ともいえるでしょう。

自分のことを肯定的に見てくれる温かなまなざし、いやなことは「いや」と言える、楽しいときやうれし  
いときは一緒に喜んでくれて、つらいとき、かなしい  
ときは慰めてくれたり、いつしよに悲しんでくれたり、  
きつと、そんな「心地よい関係」が「心地よい空間」  
をつくりだすのだと思います。

## わが園の環境（空間）あれこれ （……続きはWebで）

さて、もっと具体的なわが園の環境（空間）の工夫  
を写真付きでたくさん紹介したいと思っていたのです  
が、与えられた文字数をすでに超過してしまっていま  
す。もしも興味がありましたら、たいしてめずらしく  
もない環境かもしれませんが、当園のHPにて、動画  
で掲載しておりますので、そちらをご覧ください。木

製遊具等、ほとんど私（園長）や職員・保護者の方々  
にお手伝いだいてDIYで作ったものです。何か  
しら参考になれば幸いです。

【園のHP <http://www.sehiglobe.jp/~khi> もしくは、  
「河内からたち保育園」で検索

（はつせ・もとき）

### （註）

- （1） 環境の要素には、自然、物、人、色、色以外の視覚刺激、  
空間、動線、時間、気温・湿度・空気の質などがあり、保育  
者が環境を構成する際に考慮するとよいとされています。（高  
山静子『環境構成の理論と実践』郁洋社）
- （2） 楽しい時間はあっという間に過ぎるのに、いやな時間、  
退屈な時間は長く感じるなど。
- （3） 参考…汐見稔幸「さあ、子どもたちの「未来」を話しま  
せんか」小学館